

読者のみなさんへ

つつしんで東日本大震災のお見舞いを申しあげます。

日本を代表する児童文学雑誌『赤い鳥』は関東大震災（大正12年）がおきて、まもなく休刊になりました。この雑誌に「こんぎつね」をのせた新美南吉は、休刊を知って、ただ、ひとこと「情けない」と日記にしているようです。

ふりかえってみると、同人誌『とうげの旗』（昭和31年）が、和田登、はまみつをらによってつくられ、これがはってんで、このようにみんなに読まれる雑誌になったのは、昭和46年のことです。そのあとがきに、次のように書かれています。

これから先十年くらいは続けます。みなさんがおとなになったとき、『とうげの旗』の読者であったことをしあわせであったと思えるように、そういうねがいで作品を書き、編集を続けます。（高橋忠治）
全国でただ一つの子どもの向け地方雑誌『とうげの旗』は、多くのひとびとにささえられ、『赤い鳥』の2倍をこえる40年も続けてまいりました。

その間、オールカラーで、ゆたかで親しみやすい雑誌に力をそそいできました。そのけっか、サントリー地域文化賞、信毎賞などをいただきました。

子どもの読書のもとは、おとなの手わたしにあると信じています。しかし、子どもをとりまく読書のようにすが変わり、ざんねんなことに、雑誌の注文がへり続け、そのためにこのさき発行は、むりとはんだんいたしました。

この『とうげの旗』を、今でも待ちのぞんでおられる読者のみなさんに、たいへん申しわけありませんが、涙をのんで、第162号をもって、発行をおわりにいたします。

愛読者のみなさん、長い間、ほんとうにありがとうございます。心より感謝を申しあげます。

信州児童文学会会長

羽生田 敏